509
49

田辺淳吉氏作品集

佐藤功一編

始

509
49

田邊淳吉氏作品集

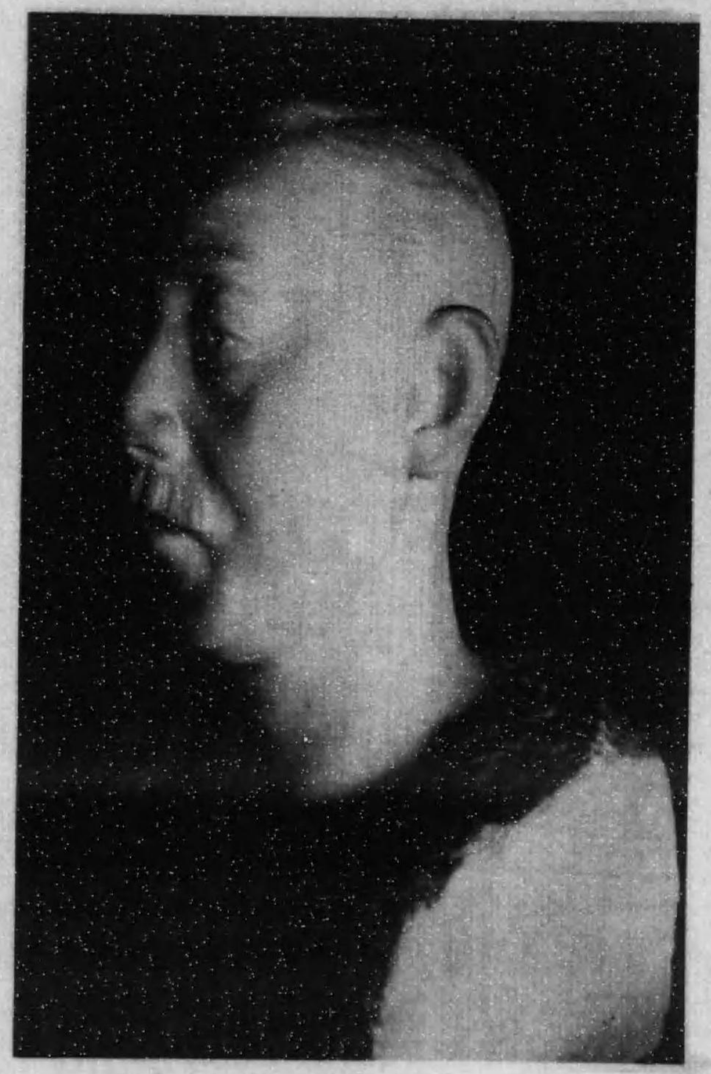
509-49

田邊淳吉氏作品集

工學博士 佐藤功一 編

東京 洪洋社發行

大正
11. 11. 3
購求



田邊淳吉氏石像

武石弘三郎氏刻

序

能辯にして技倆之に適はざる者もあり。又技藝巧みにして言語甚訥なる者もある、即ち前者は口の人にして後者は手の人であるが、各一長一短あれども、建築家の如きに至つては、子は寧ろ後者を取らんと欲するのである。

予の畏友田邊君は、實に前兩者の長所を併有するものであつて、人と談論するに當りては、論理整然而も妄に多辯を弄せず簡潔深く其意を盡さるゝのである。又黙つて手一度び圖面に觸るれば、奇想忽ち溢流し、良案立どころに成るのである。眞に君は口の人にして且手の人と云ふべきである。否君は實に頭腦の人といふべきである。

是頃佐藤博士は、筐底に秘め置きたる、田邊君傑作の一部を蒐集し、以て之を世に公にすることを企てらる。斯くて、田邊君の智能の結晶と博士の友誼とに基く本書は、必ずや光輝を放ち世を啓誘すること大なるべしと思ふのである。

大正十年三月

工學博士　中村達太郎

序

一人の建築家が長い間辿つて來た憧れのパッスを、繪卷を繙くやうに靜かに點檢して、其處に時と共に遷り行く製作態度を解味するのは面白いことである。私はこの意味に於て、今回同窓田邊淳吉君の建築作品集が佐藤君の手によつて編まれたのを嬉ふものである。

此に集められたものは、田邊君が多年直接間接に關係された建築物中の、ほんの一部分に過ぎないであらうが、何れも氏の眞純な心を傾けた作品であることを疑はない。編中池田侯爵邸の設計は、注文者の希望を容れて可なり嚴しい條件の下に製作されたものであるが、誠之堂、晩香廬の如きは、他から拘束さるゝことなしに氏の自由製作の對象として提供された好個の題材であつたから、氏自らも樂みつゝ設計に從事せられ、百分一の概觀圖から局部々々の詳細圖、總ての部分の現寸圖に至るまで、悉く自ら圖案し、其上材料の選擇色の取合せから家具の考案にまで自分一己の周到な考慮をめぐらして出來上つたものである。これ等の仕事は言はゞ清水組の人としての道樂仕事で、氏が半生に於て裕やかに主力を致した彫鐫鏤刻の藝術的作品であつた。

田邊君の得意とする所は多方面であるが、その中にも數寄屋風の洋館、茶がゝつたヴィラなどには他人の到底企及し難い特技を示される。私は氏が將來この方面に益々傑作をものされんことを至囑して止まないと共にこの作品集を世に推擧するものである。

大正十年四月

工學博士　大熊喜郎

序

田邊淳吉君は明治三十三年東京帝國大學で一つの教室に席をならべる樣になつてからの友人である。當時の同級八人の內では、大學へ來る迄最も多く美術的教養を受けて來た一人であつた樣に記憶する。自分から見ると今でもそうであるが、一寸不思議な性格の持主で、一面に大變に几帳面で理性のかつた、そしてまた意思のつよい所があり乍ら奧の方に豐かな感情のほのめきがあつて、所謂藝術家的本分といふ樣なものがどこからともなく湧いて居るといふ人である。それでたゞ一寸あつた丈けでは何となく冷たい感じがある樣に見えるが、一度田邊君の製作をして居る傍に立つて其の態度を見て居ると、以上の感を深うする。

田邊君は單に流行を追ふとか、殊更に依賴者の意向に投じて製作をするといふ事は全くしない人である。一つの仕事に對しては充分なる研究と默想とがあつて、そして後に筆を取ると云ふ行き方である。外國雜誌から輕るい感激をうけてそれを直ちに紙上にあらはすといふ事の全く出來ない人である。此の眞摯の態度はよく作物の上に顯はれて居る。

明治四十二年頃歐米を旅行されて後殊にそうであるが、田邊君の作物には、或る建築家だちの好んでする樣な、舞躍をして居る樣な形のものはない。どこまでも靜止の狀態にある。筋骨は靜止して居るが眼をあいて息をついて居ると云ふ種のものである。歐米旅行以來伊太利風のものを好まれて居る樣だが、其の精神を好まれて居るので、其所に模倣といふ樣な點を見出す事は出來ぬ。

恩師塚本博士が田邊君と自分とが美術品の鑑賞に對する態度の全く反對に表はれる趣を批評せられたそうだその事を今茲に發表する事はやめにするが、實にうがつた批評であると我ながら失笑を禁じ得ぬ次第であるが、田邊君と自分の性格は殆どその樣に變つて居り乍ら、其の建築作物に對しては全然共鳴を禁ずる事が出來ぬ程、一致した所があるのであらう、自分は田邊君の作つた家がすきである。

此の意味でいつかは田邊君の建築作品集を編んで、廣くこれを江湖の諸君におすゝめしたいとは豫めの希望であつた。

所が今度同君は在來其の技師長であつた所の清水組をやめて、新に事務所を開かれる事になつた。或は此の期を限界として作物の行き方に或る變化を來す事があるといふが如き、何か更に興味ある事實が將來に起つて來るかも知れぬ。これはどうも、そうあるのが本當だらうと思ふ、されば先づ將來の作物の編纂は次の問題として、此のあたりで一つ作品集をまとめるのが意義ある事であらうと思つて、同君の承諾を得て、洪洋社の好意で出版する事にした。自分の希望では四六四倍位の大冊物にしたかつたのであるが、賣價の問題を考慮して殘念乍ら見らるゝ樣な小冊子にしたわけである。これは一面田邊君の御諒解を願ふと同時にこの本を購はるゝ諸君に御承知を願ふ次第である。

大正十年五月

工學博士　佐藤功一

田邊淳吉氏作品集

工學博士　佐藤功一　編

田邊君が清水組在職中に關係された建築は、數に於て決して少くなかつた。しかし明治三十六年から大正九年に至る在職足掛け十八年間の前半は、一技師として上長の命に支配せられた所が多く、またその後半は技師長として自由手腕を揮ひ得る地位に在つたけれども、職務上の關係から事務的乃至社交的方面の活動を餘儀なくされたので、沈着いて建築製作に耽る暇が比較的少かつたのと、また一には氏が後進を誘掖する懇篤な念慮から、意匠設計上の好題目は成るべく後進者の修養研究の資料として之を讓るに努めたので、其の一意專念自ら手を下した獨特の作品と稱すべきものは、餘り多數に上らなかつたのである。けれども田邊君は、一度自分が之れと思ふて手を着けた設計は、先づ其のスケッチを始として、內外の必要諸圖面、仕樣書の如きは勿論、窓掛け卓子椅子諸什具の細部に至るまで悉く自ら手を下さなければ已まなかつた。隨て設計と銘打つたものは一線一畫の末に至るまで、何處を捉へて見ても田邊君自らの現れて、實に微細な點にまで其の精神が打込まれてゐた。斯樣な作品は假令其數に於て寡少であらうとも、鑑賞者に與へる肝銘に至つては甚だ大きい事と思ふ。此に集めた作品は建物に於て僅に七八箇所を數へるに過ぎないが、その何れもが過去十八年の多忙なる生活の間に於ける氏の眞摯な藝術衝動の發揮である。前にも述べた樣に田邊君の製作に奇拔とか豪放とかいふやうな點を求めようとするのは無理である。然しよくまとまつた落付きの滋味の裡に一種自由な暢達な手腕の迹を認めることが出來る。

以上は氏の製作に對する編者の感想の一端である。以下個々の作品に就て簡單な說明と寸評とを加へることゝする。

第一圖　東海銀行本店

之れは作品が明治四十年前後の製作として當時同輩の間に推賞されたものである。作者の處女作ではないが、初期の製作である。此の建築が出來た當時と異つて今日の日本橋界隈は

和洋の大店舗建築が雜然と蝟集してゐる。然し其間に在つて依然優秀なる異彩を放つてゐるものは此の東海銀行であつた。プランには同意し難い點があるけれども、それは作者が設計に關係する前に既に決定してゐたもので、作者が何うすることも出來なかつたといふことである。

第二圖　某博覽會の習作

之れも氏が舊作の一で大正四年頃の作である。某所からの依頼に應じて立案されたもので、これは所謂際物であつて、殊更に目先きの變化を企てたものだといふ事が明瞭で、他の作物の行き方とは全然異つて居る。田邊君の本領が此の種の計畫よりも別に存する事は、此の書を繙く人の直ちに了解する所であらう。

第三圖　日本倶樂部の習作

之れは目下工事中の建築で、此作品集中最新の製作である。工事中であるから實物寫眞を掲げることが出來なかつたが、內外單純なる意匠の中に幾多獨特の技倆を發揮したものである。作者は此に其の作風の大なる轉化を示してゐる。

第四圖　誠之堂の外部　表入口附近
第五圖　同　上　側　面
第六圖　同　上　庭　正　面

誠之堂は第一銀行の諸員が創立以來の頭取青淵澁澤子爵の頭取引退に際して、其の功勞を讃し旁〻子爵の喜壽を祝する爲め、府下多摩川電車終點附近の第一銀行所屬運動場の清和園に建設した一の記念會堂である。僅に三十坪餘の小堂であるけれども氏の製作中最も見るべきもの〻一であらう。其內外に於ける煉瓦の配列には就中意匠上の省察が現はれてゐる。木材は主として杉を生地のまゝ用ゐてゐるので、素朴な煉瓦と調和が頗る宜い。大體の風趣は英國の田園趣味に基いたものであるけれども、朝鮮支那あたりの手法をも巧妙に取入れてある。

此工事に於て建物四周の植樹の如きも、悉く氏自身の意匠と指揮とに依つて布置されたといふことである。大正五年の落成である。

第七圖　誠之堂玄關內部見返し
第八圖　同　小　房

玄關と小房とは間に小廊を置いて聯絡してゐる。此圖によつて作者が建物內外の調和といふことに如何に細心留意せるかを窺ふことが出來やう。第七圖の方は小廊を通じて小房を透見したところで、小廊の右側は化粧室となつてゐる。第八圖は其の反對に小房內部から小廊の方を見たところで、前方の突當りに見えるのは便所である。木部は一切杉の生地で、材料の原質を顯はした淳朴なもの、單純な通路の中にステーンド・グラスを通して化粧室からの柔い光線を導いた所など、質實の裡に技巧のデリカシーを見ることが出來る。

第九圖　誠之堂廣間

之れは誠之堂內の主要部で、幅三間長五間の一室である。勿論大房とは言へないが、全體が氣持の宜い室である。正面煖爐上のブロンズ・レリーフは青淵澁澤子の肖像で、武石君の作と聞いて居る。天井の模樣は朝鮮の雲鶴文樣を應用したもの、松葉を其間に配したところなど澁味の中に斬新な趣致を見せてゐる。煖爐兩側小窓のステーンド・グラスには支那漢代畫像石中の人物から暗示を得たらしいもので、古雅愛すべく、また爐前に置かれた子爵の記念椅子には漢宮の瓦文から寫し來つたらしい「長生無極」の四文字を其脊張の文樣に現はし中々氣取つた配合である。

第十圖　バンガローの習作

大正七年清水組が澁澤子爵八十の壽を祝する爲、府下王子飛鳥山の子爵邸內に記念の一字を營んで寄附するの企があつた。本圖はそのバンガローの習作である。然し惜いかな此の設計は遂に實現せられなかつたものである。そして第十一圖に示す第二の案が實施せられたのである。作者は恐らく非常に遺憾としたことであらうが、庭內の都合で作者の希望した位置が得られなかつた爲已むを得ず廢案としたといふことである。日本趣味を巧に粧點つた小亭設計の好意匠として推賞するに足る作だと思ふ。

第十一圖　晩香慮外部

澁澤邸內に實現された小亭は是である。これなどはまた作者の深い研究と默想とから迸り出たもので、用材を栗とし、西京の錆壁を塗り、石に格子戸を嵌め込み、鐵平石で氷裂形の敷石を造るなど、飽迄氣の効いたそして自由な意匠と手法とを示してゐる。和洋の樣式を渾然一和した恣なる手腕は羨望に堪へない。亭前庭石の布置は別人の工夫と聞いてゐる。晩香廬は Bangalou の字音に當て嵌めたもので、澁澤子の詩の一齣「菊花晩節香」とあるのに因み、子爵自ら命銘したものといふ。

第十二圖　晩香慮內部

コムポジションは單純だが、十二分に作者の技倆を輝つたものであらう。見て行く程に琢磨されたデテールを發見する。腰羽目は萩莖の立簾、壁は青貝交り、煖爐兩側の小窓には淡貝を利用し、また爐邊りは一樣の煉瓦を色々に組合はせて中央に「喜」字の模樣を點出してゐる。備附の椅子はあけびの皮付である。

第十三圖　晩香慮內部の習作

これは晩香廬內部の色彩の研究に費したものだといふ。前圖の設計とは稍違つてゐるが、參照の便に供する爲挿入したのである。

第十四圖　川喜田別邸廣間

川喜田別邸の原作者は別人であるが、此廣間だけは大正八年

主人の囑望で、田邊君の意匠に依り模様替されたものである。天井や、右方に見える入口扉や、左方の腰羽目や、階段の主要材等は何れも原設計の材料を利用したものであるが、煖爐周圍の原形を一變して得意の技を示した上に、氏の考案に成つた家具を配したから、室の面目は全然一新した。編者は未だ改造後一見の機會を得ないけれどもステーンド・グラスを利用して爐壁に軟調な光線をあてた邊は最も作者の用意の存する所と聞いてゐる。

第十五圖　池田侯爵邸車寄
第十六圖　同　上　庭正面

此の二圖に示す池田邸の外觀は氏の設計ではない、當時氏の下に働いてゐた西村工學士の設計に成つたものといふ。編者の聞く所によれば主人池田仲博侯は頗る建築好きで、間取は勿論、外部は和樣內部は洋式と設計の根本方針まで侯自ら決定した上依賴されたといふことである。從て氏は專ら其の內部の設計を擔當したのであるが、內外別々である丈け取扱ひ惡い苦心が存したことゝ思ふ。全體の間取は何れかと云へば簡單であるけれども、それに巧に變化を與へた所に作者の技倆が窺はれるであらう。此の外觀圖二葉は氏の取扱つた內部の意匠に自ら關聯してゐるので挿入した。竣成したのは大正九年である。

第十七圖　池田侯爵邸玄關內部

純日本式の車寄から純西洋風の廣間に移る突然な變化を緩和する爲に、此玄關の意匠は相當の苦心を拂つたものと想像される。夫れだけまた効果の現れた作風である。

第十八圖　池田侯爵邸廣間

氏としては寧ろ平凡な作に屬する。此室には特に新奇を望まなかつたでもあらうが。

第十九圖　池田侯爵邸應接室

此の室の意匠も亦廣間と大同小異で、氏としては寧ろ平凡の作である。

第二十圖　池田侯爵邸客間
第二十一圖　同　上
第二十二圖　同　客間の次室兼廊下
第二十三圖　同　食堂

客間はルイ十六世式、食堂は中世英國式に意匠をよせたものである。是れは客間食堂兩室間の變化に意を用ひた結果とも見られる。非常に行屆いた木工作で、客間に於ては毫も嫌味のない纖細な繰形を示し、是れ迄の作者とは別人であるかの如き感を與へてゐる。次室兼廊下に於ても感じが同樣である。廊下としては濶大にそして華麗なものであるが、是れは客間食堂の中間に位する廊下であるから、力めて客間の次室化し其の利用の途を廣めると同時に通路としての變化を求める方途に出でたものといふことである。

第二十四圖　池田侯爵邸合の間
第二十五圖　同　上

此の合の間も表から奧の夫人客間に通ずる廊下の一部であるが、階段のあるのを利用して第二廣間の形として、安易快活なる意匠に任せた所が取るべき點であらう。

第二十六圖　池田侯爵邸夫人客間

合の間に接した奧向の客間である。こういふ風に所謂和樣と洋風とを調和せしむる意匠は作者の得意とする所である。

第二十七圖　池田侯爵邸奧の廣椽

夫人客間の二方を圍む廣椽で、第十六圖右端の破風造りの部分である。

第二十八圖　池田侯爵邸侯爵書齋
第二十九圖　同　夫人書齋

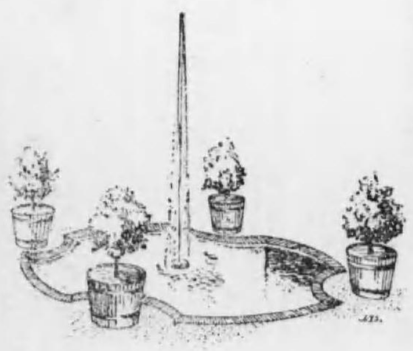
此兩室は相隣つて配置せられ、近代的新傾向の手法を以てして居る。第十六圖階下中央の內部が此二室のある所である。意匠として特に論ふべき點を見出さないが、デテールに注意せると、侯爵と夫人とに對して別々の考慮を拂ひ、同樣の意匠中にも調和を缺かぬ程度の變化を露呈せしめた作者の細心に首肯せしめられる。壁紙、椅子、煖爐前飾などを熟視すると自らそれが諒解されるであらう。

第三十圖　池田侯爵邸煖爐前飾
第三十一圖　同　上
第三十二圖　同　上

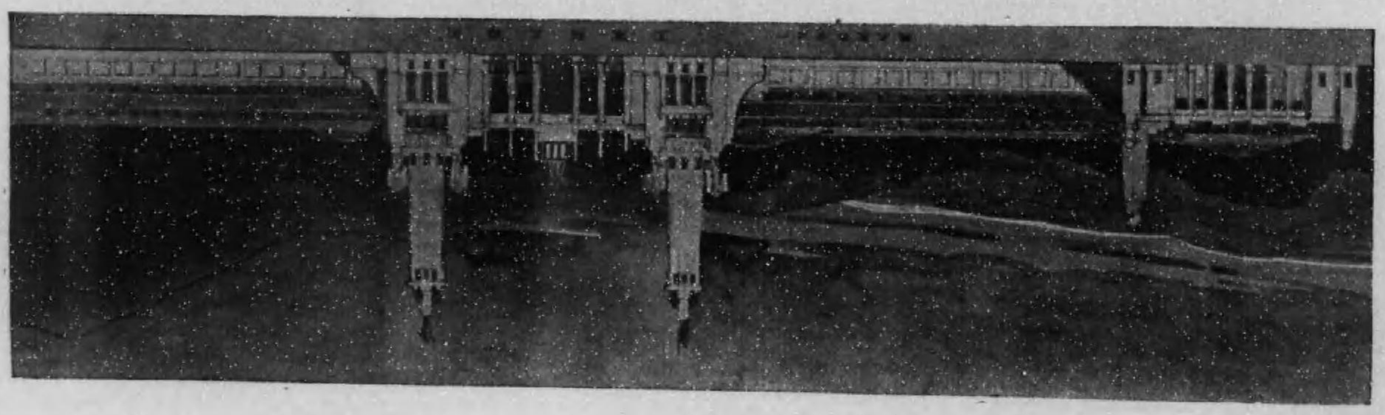
各室各種の煖爐前飾を示したものである。陶器に深い趣味を有つた作者は、特に京都へ注文して新しいタイルを得、それを夫人の客間の煖爐に使用した。侯爵書齋の槌目銅板は特に作者の考慮を拂つたものである。

第三十三圖　池田侯爵邸階段と廣間の窓

此のステーンド・グラスは氏の意匠として推賞に値するものとは思はれないが、むき出しに作者の面目を表はすためと圖の都合上茲に掲げたものである。



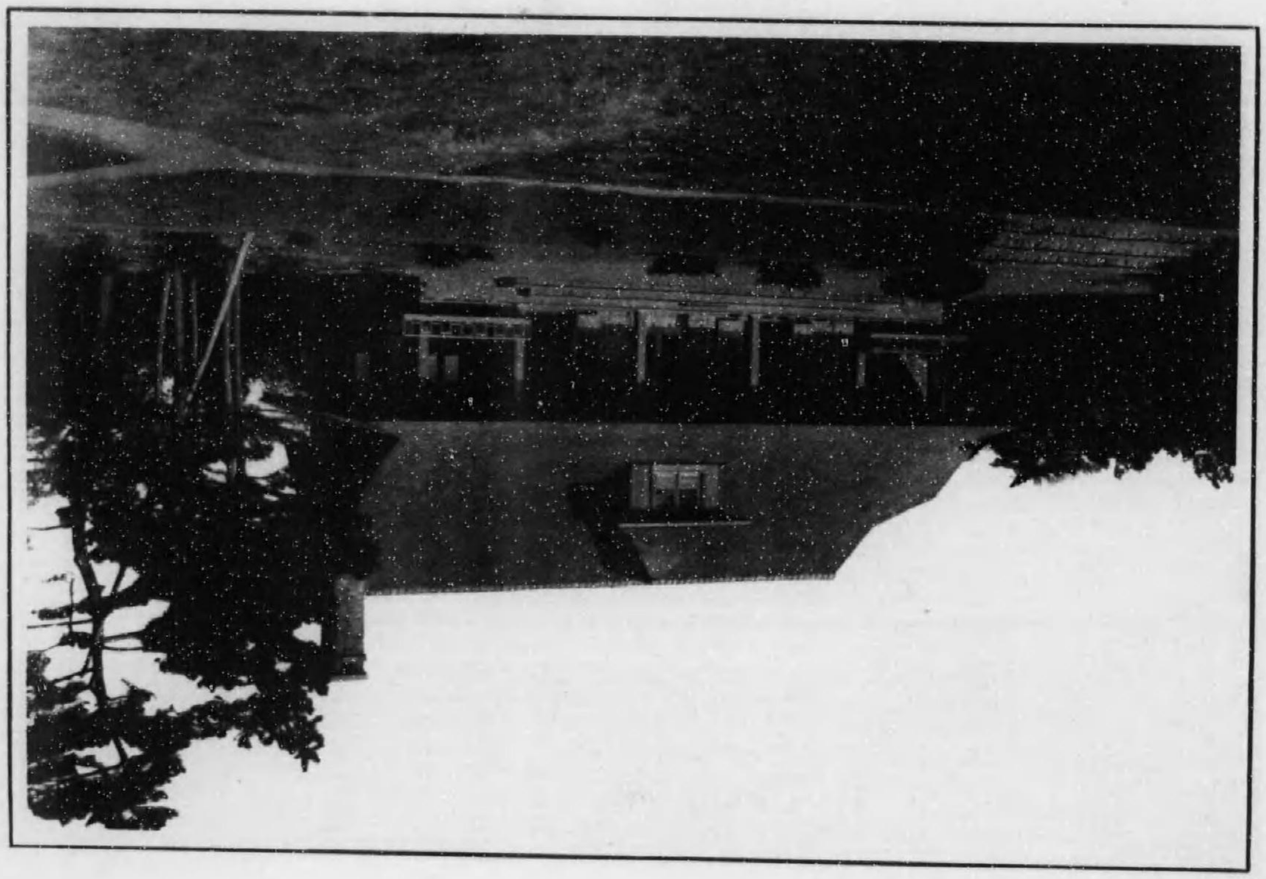
第一圖　東海銀行本店　東京日本橋區英國町

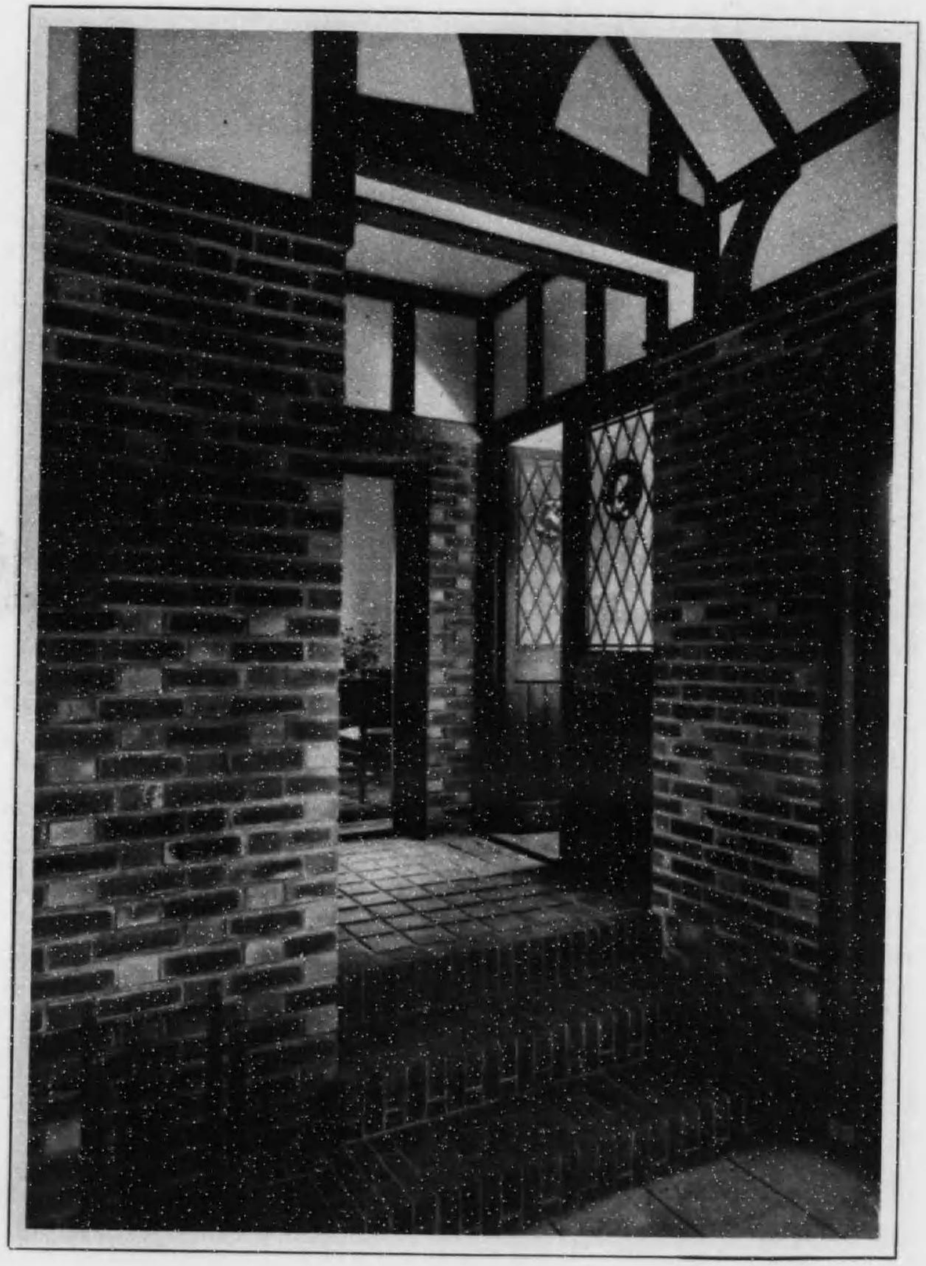


第三圖　日本倶樂部　東京丸の内　替作

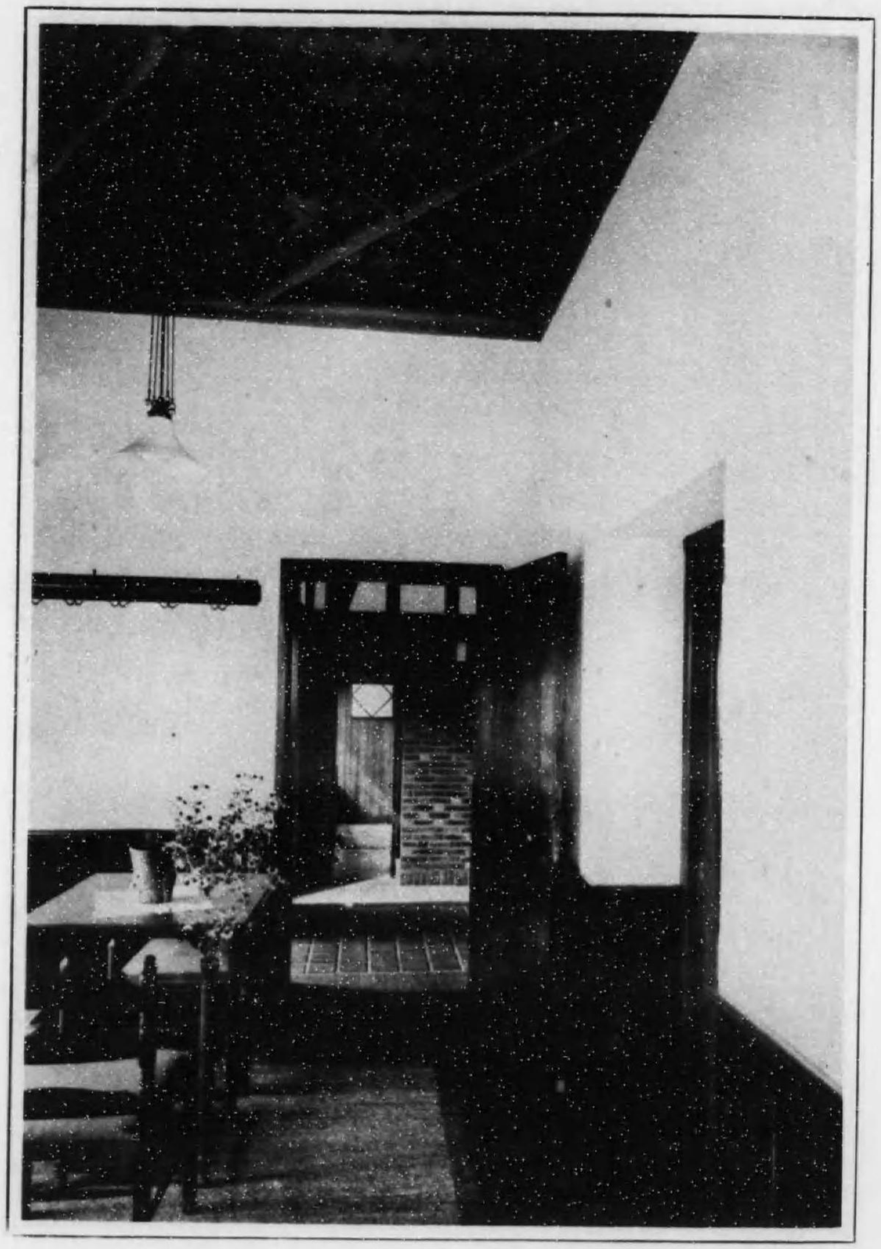
第四圖　　武之藏　東京府下多摩川　　清和園內表入口

第五圖　　滋之堂　清和園內　　側面



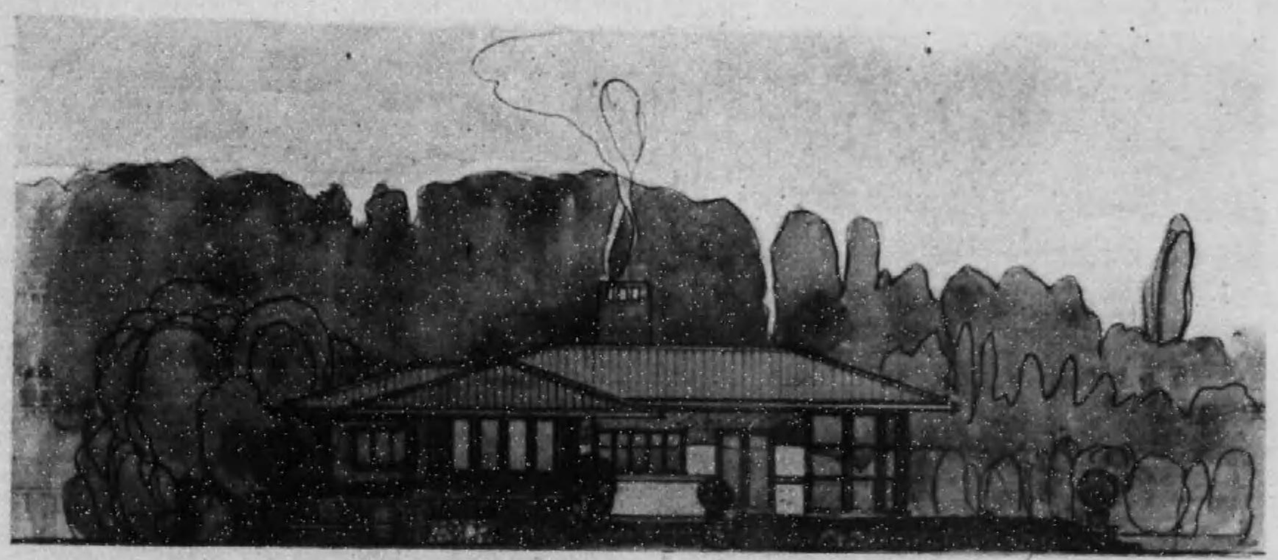


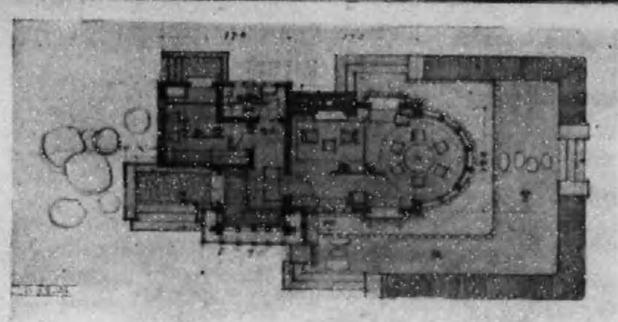
第七圖　誠之堂　清和閣內　玄關見返し



第八圖　誠之堂　清和園內　小房

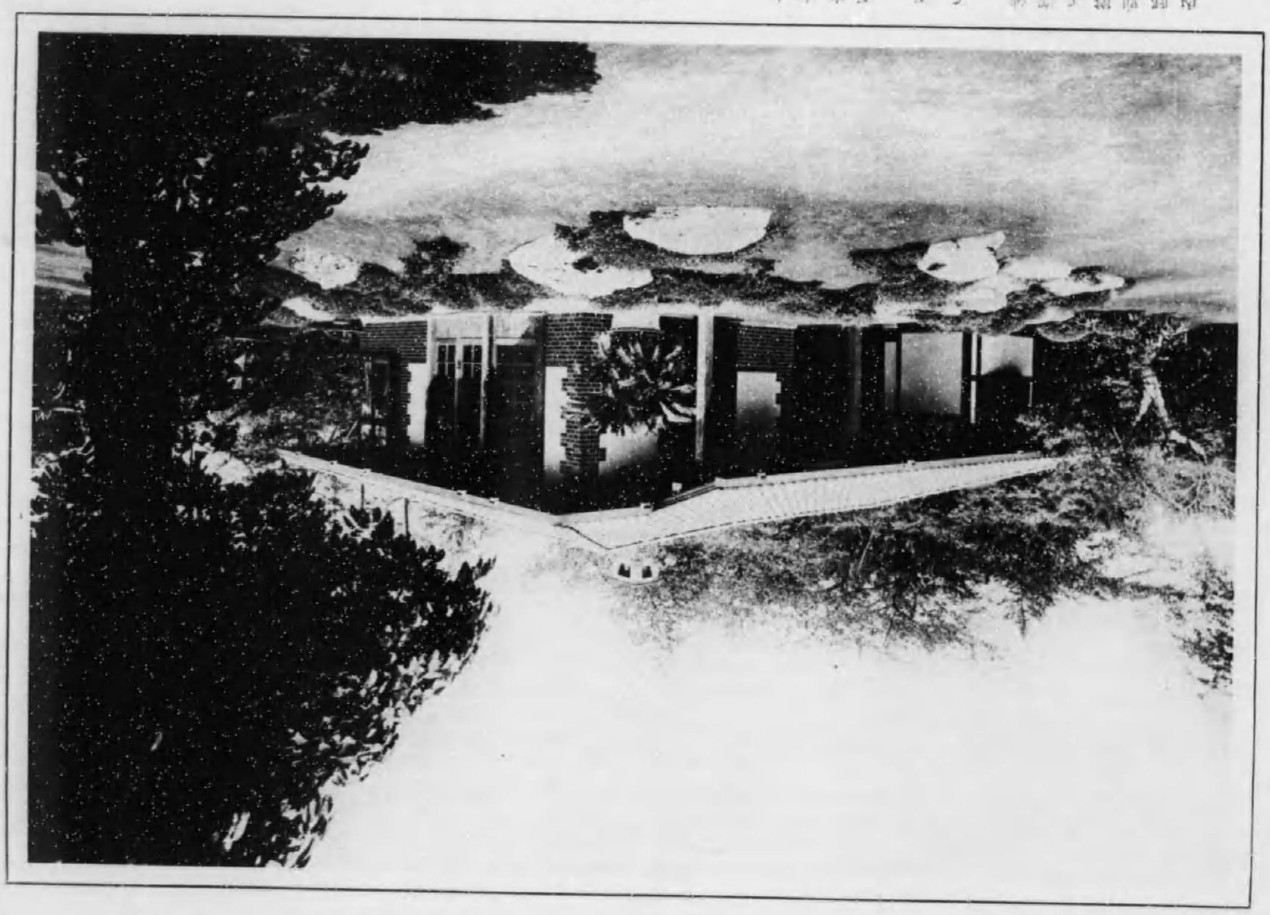
第九圖　　清和園內　　廣間



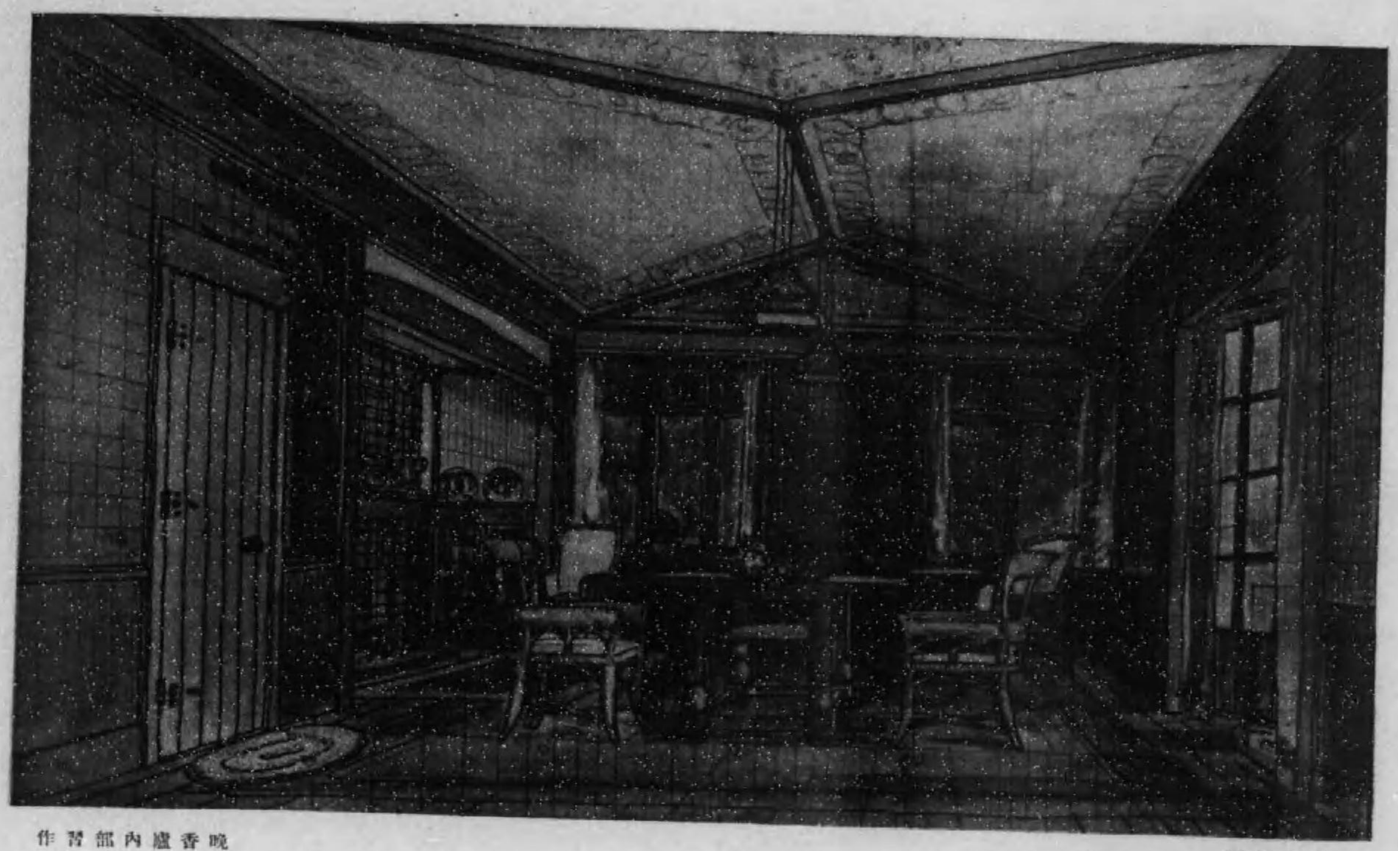


第十圖

バンガローの設作

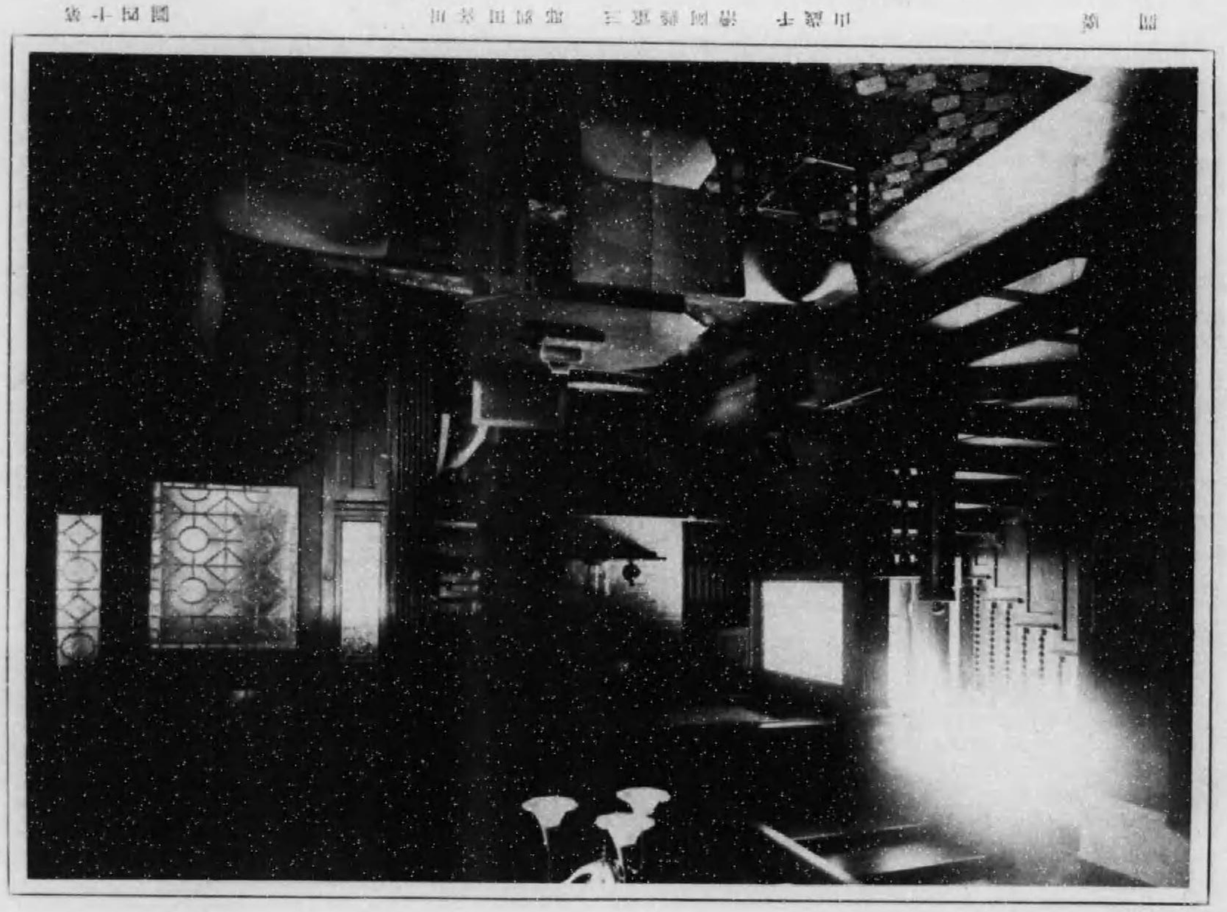


第十二圖　　鹿香園　徳澤子爵別邸內　　內部

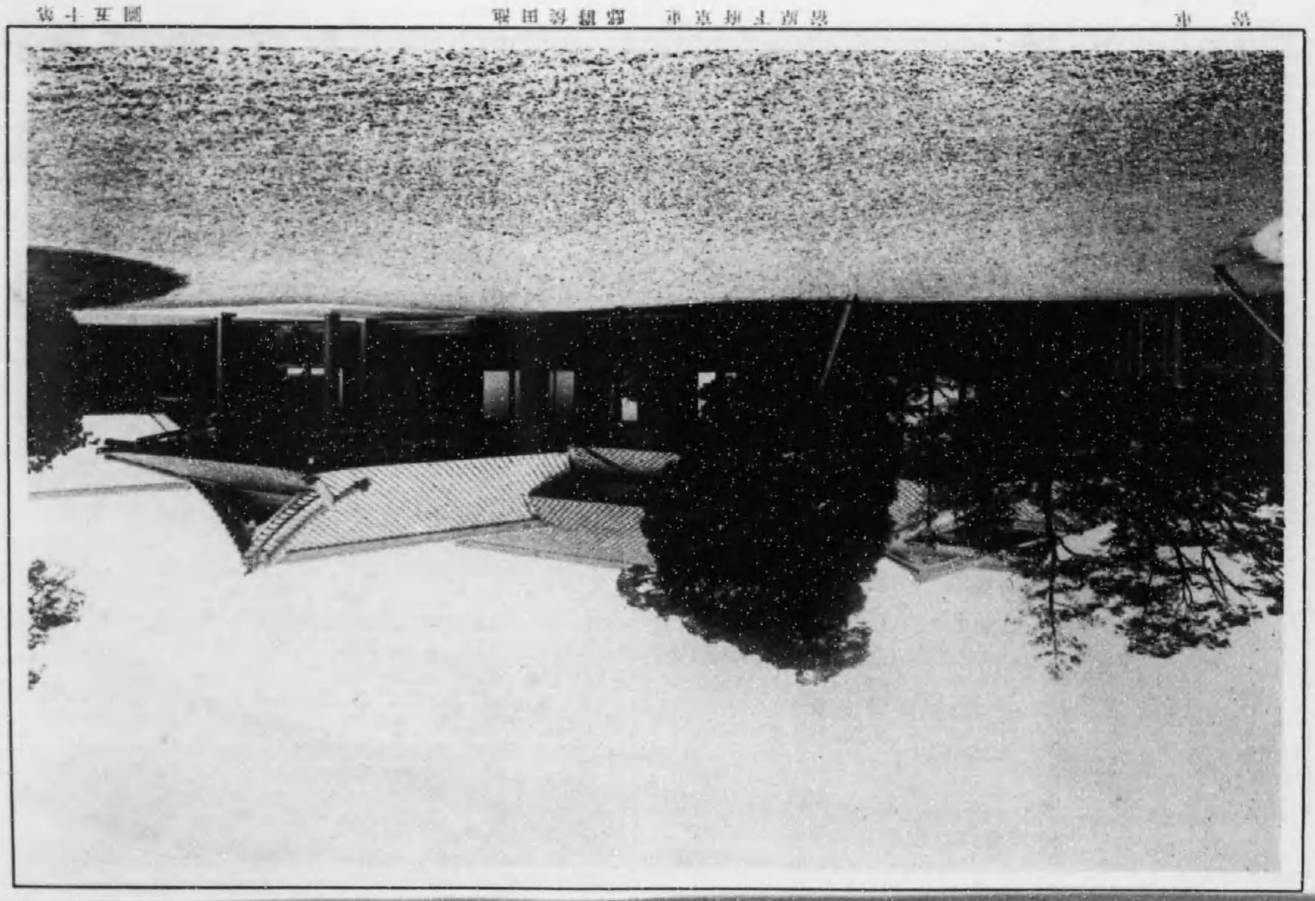


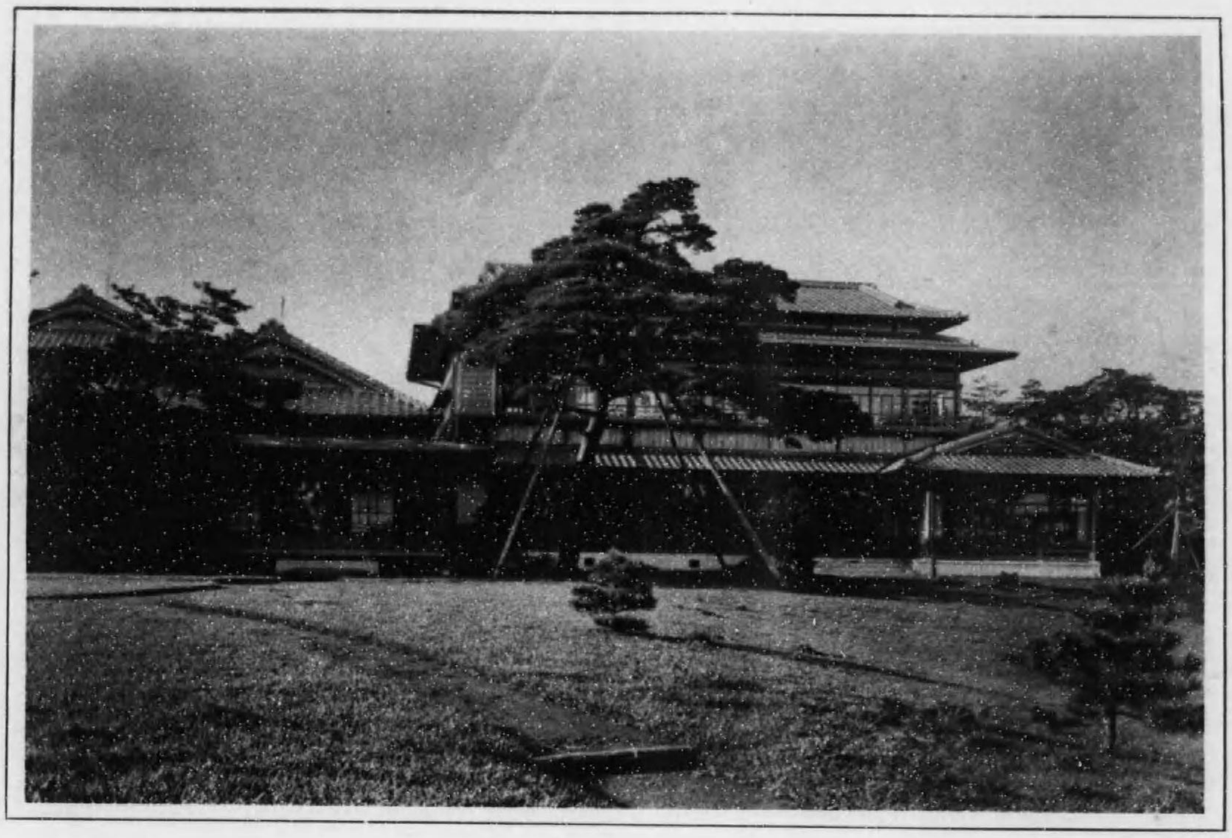
晚香廬內部習作

第十三圖

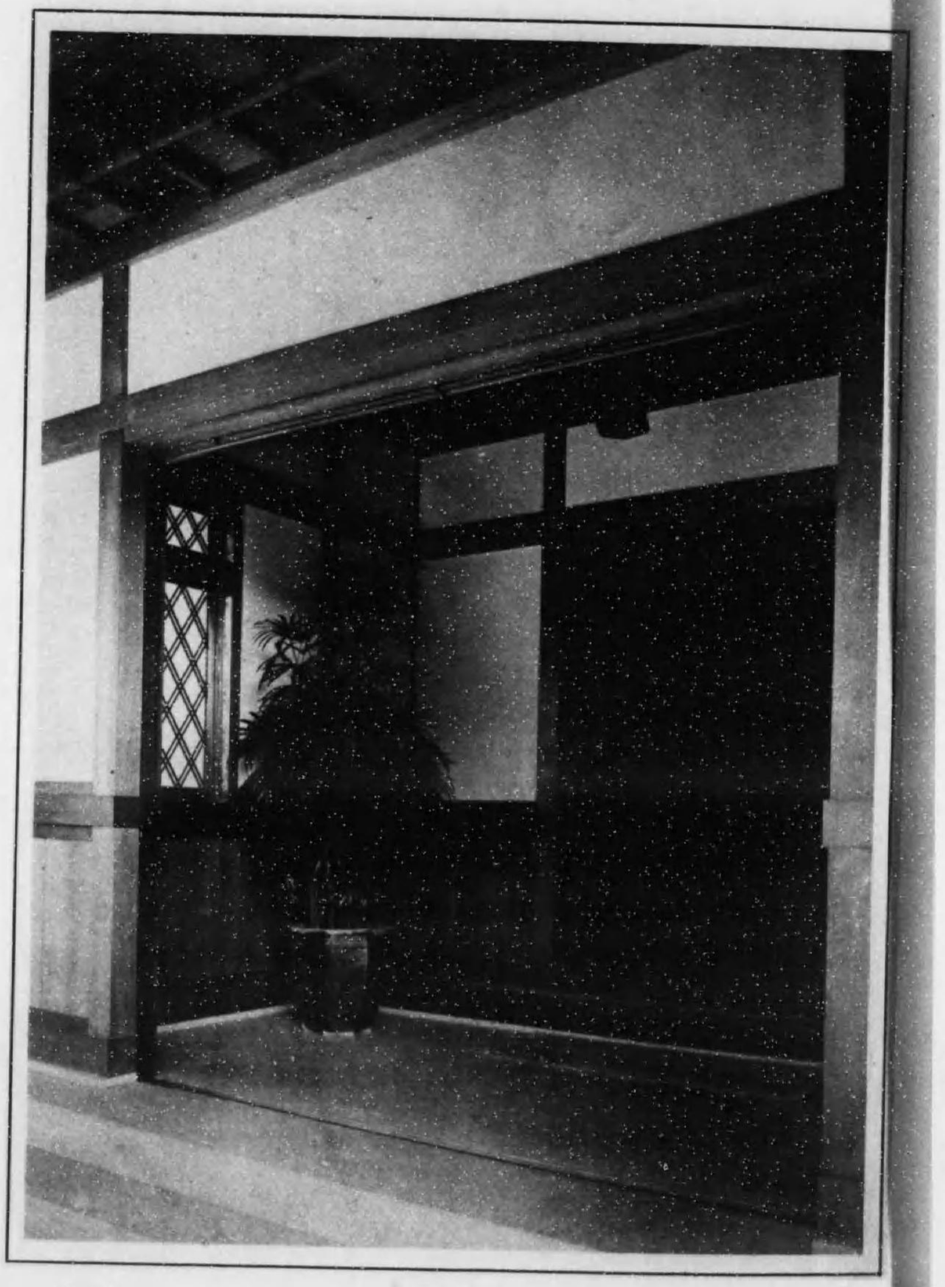


開　館　　山邊千　帝國銀行三　常設出張所　　圖版十一

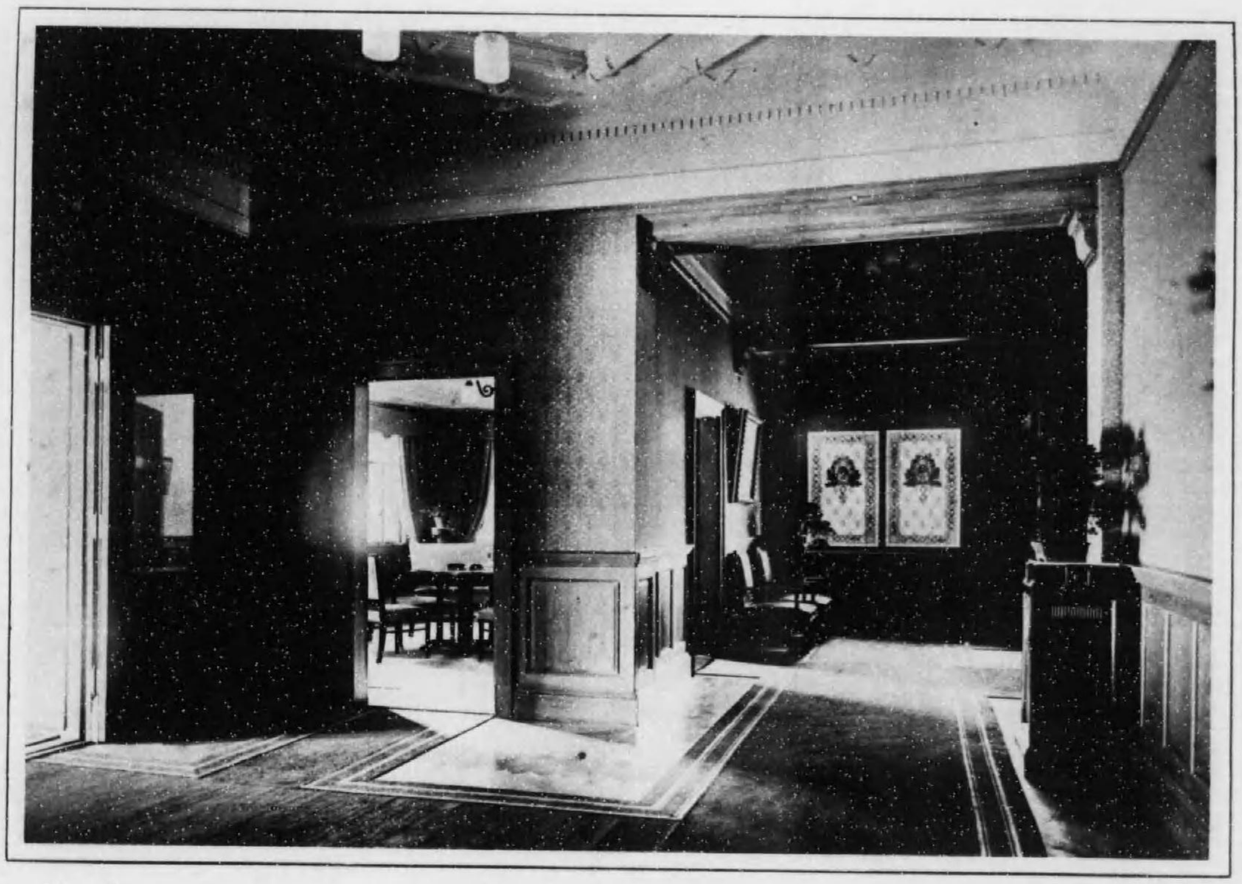




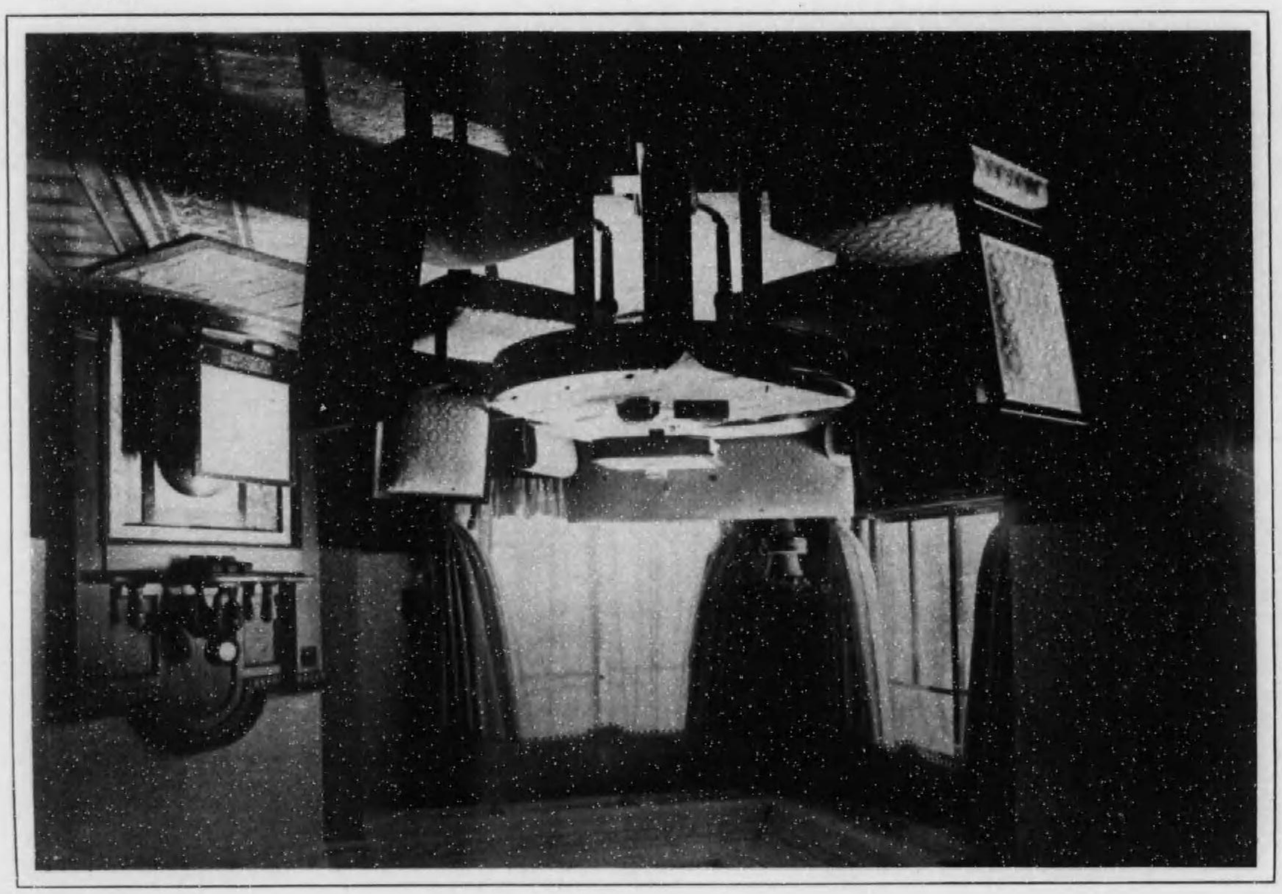
第十六圖　　池田侯爵邸　原宿　　庭正面

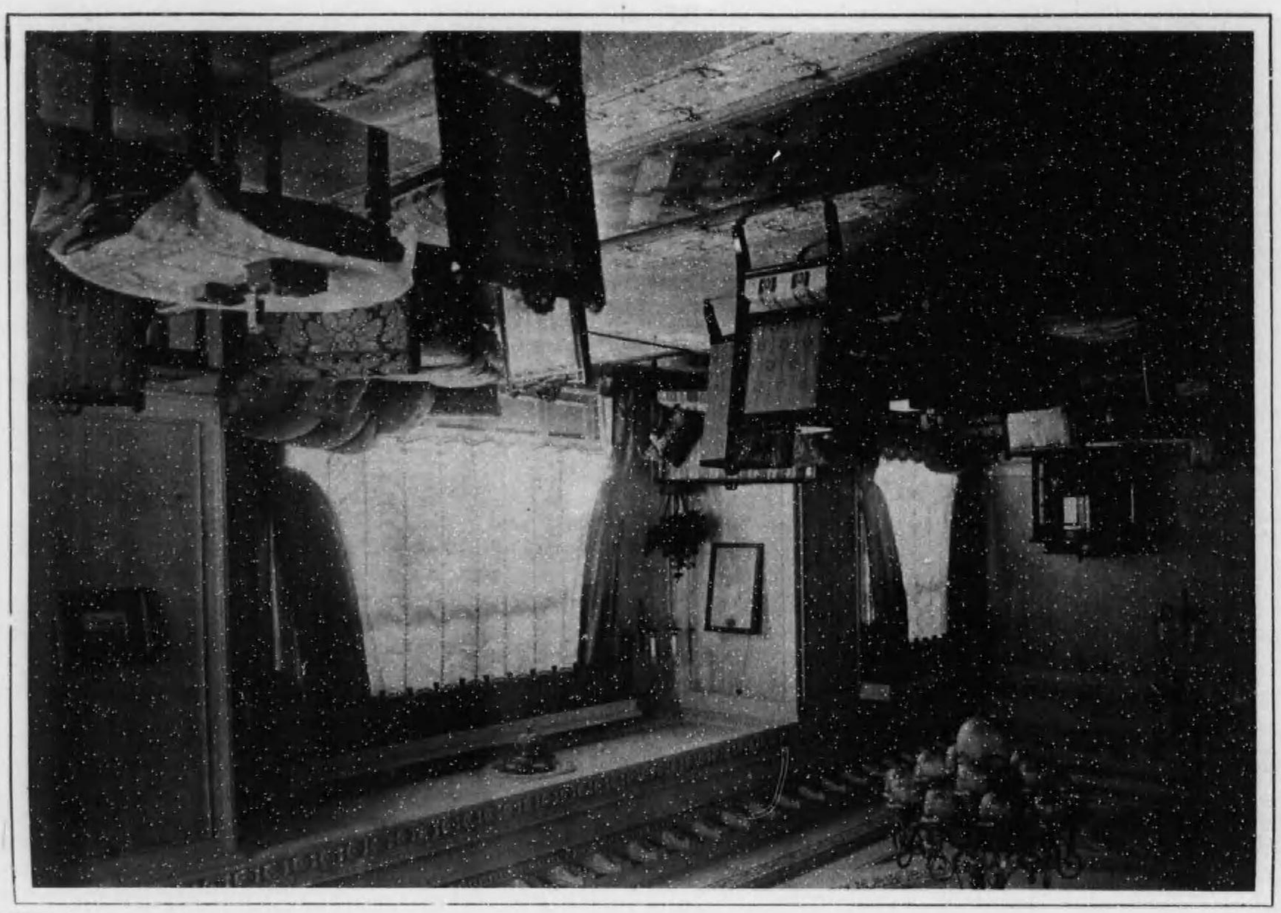


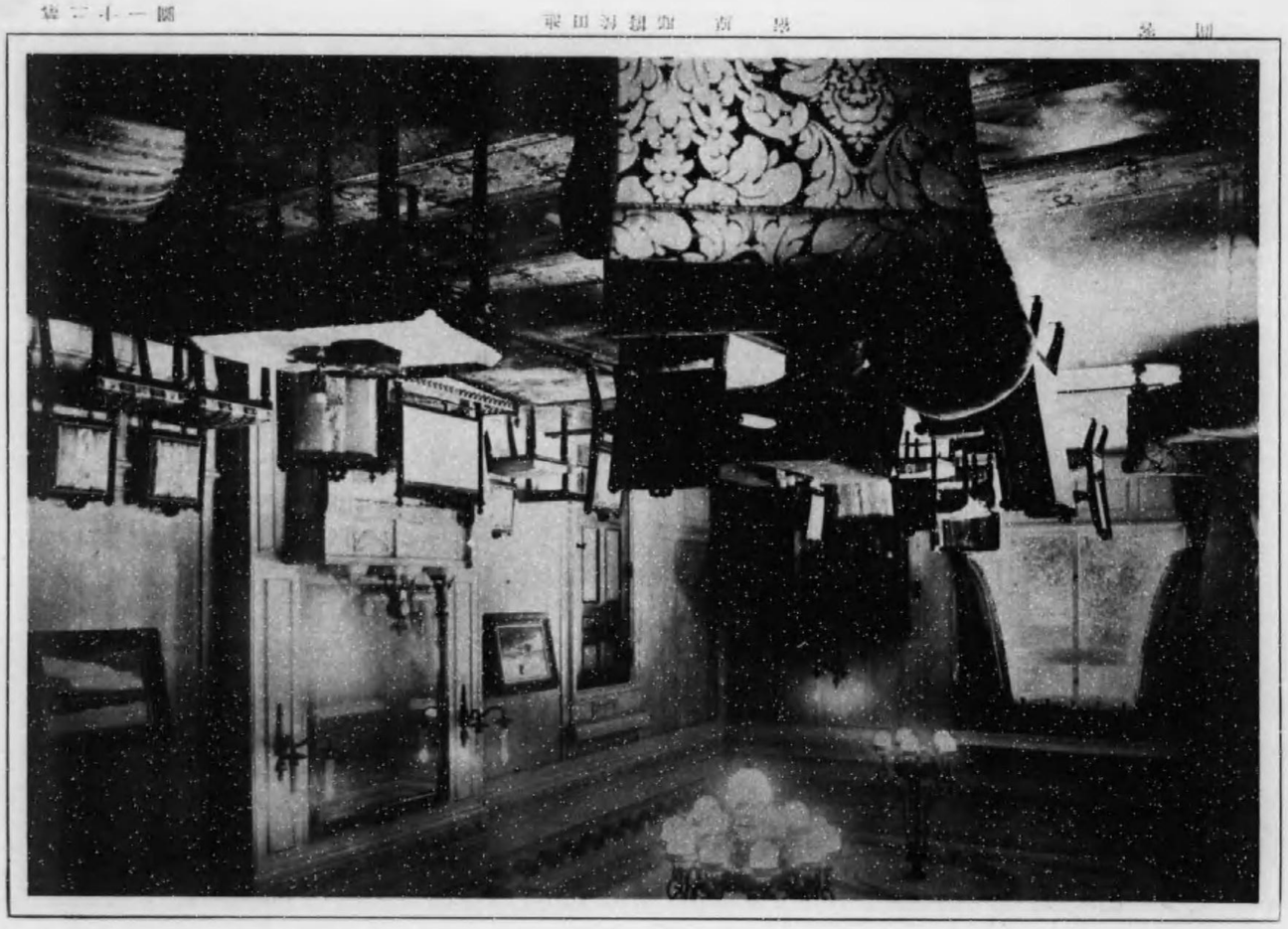
第十七圖　池田侯爵邸　原宿　玄關



第十八圖　池田侯爵邸　原宿　廊間

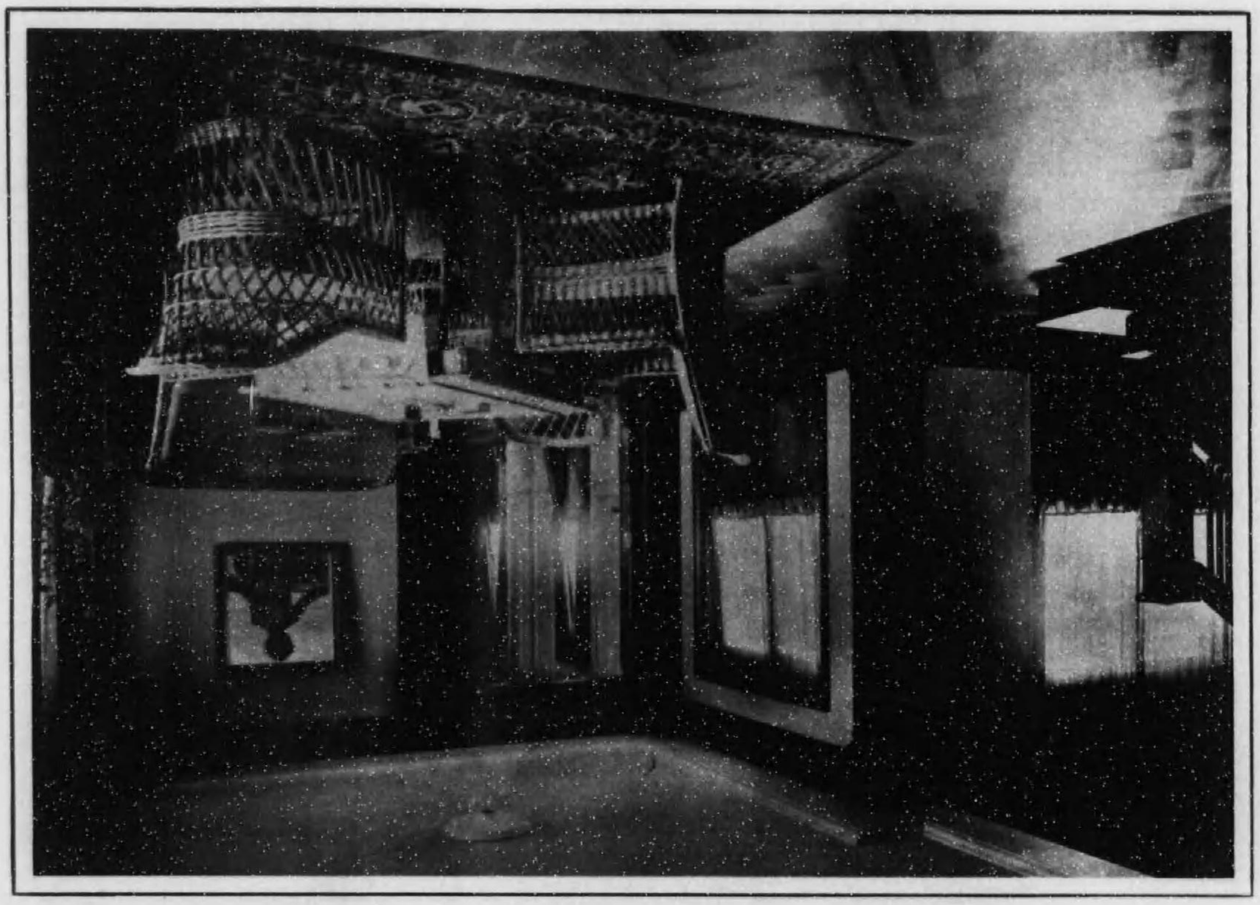


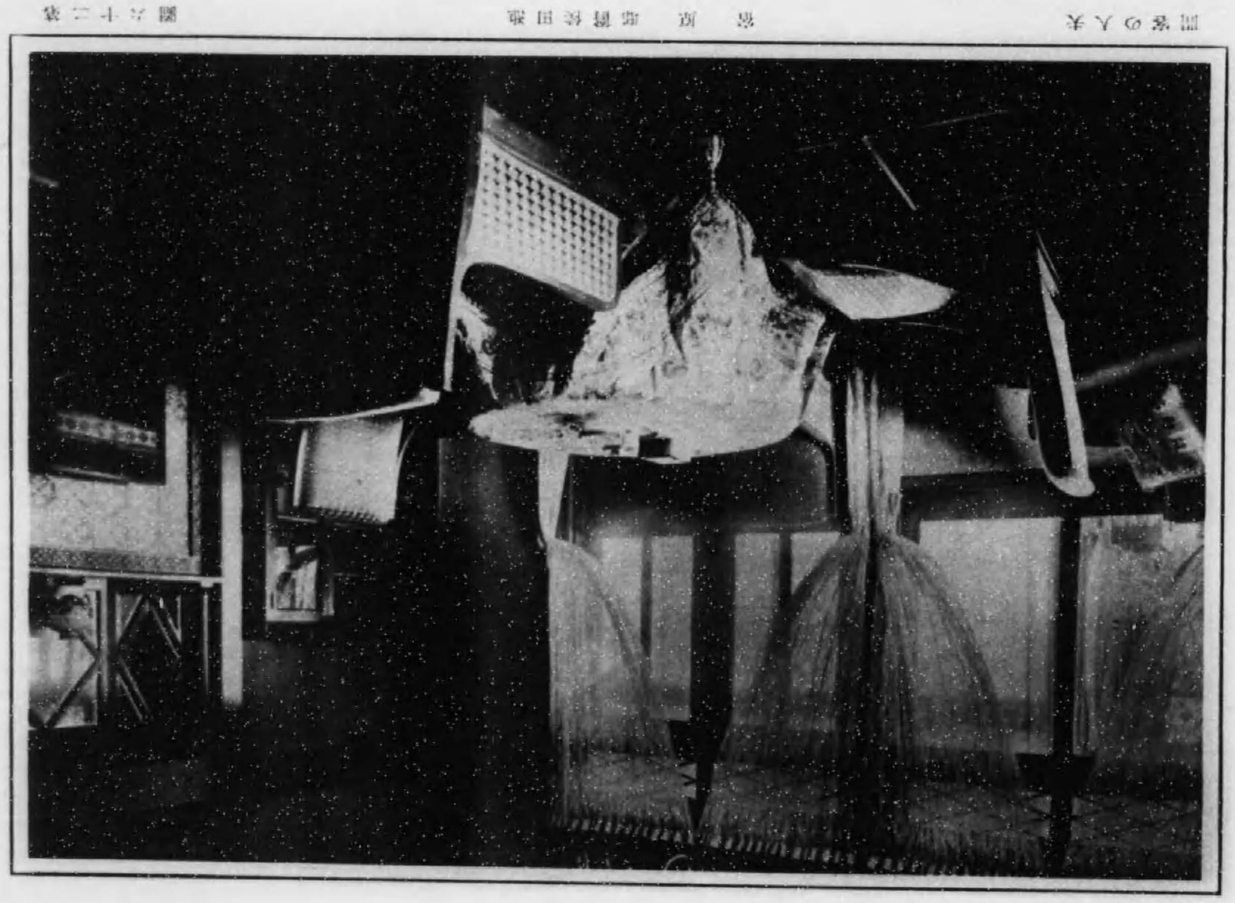




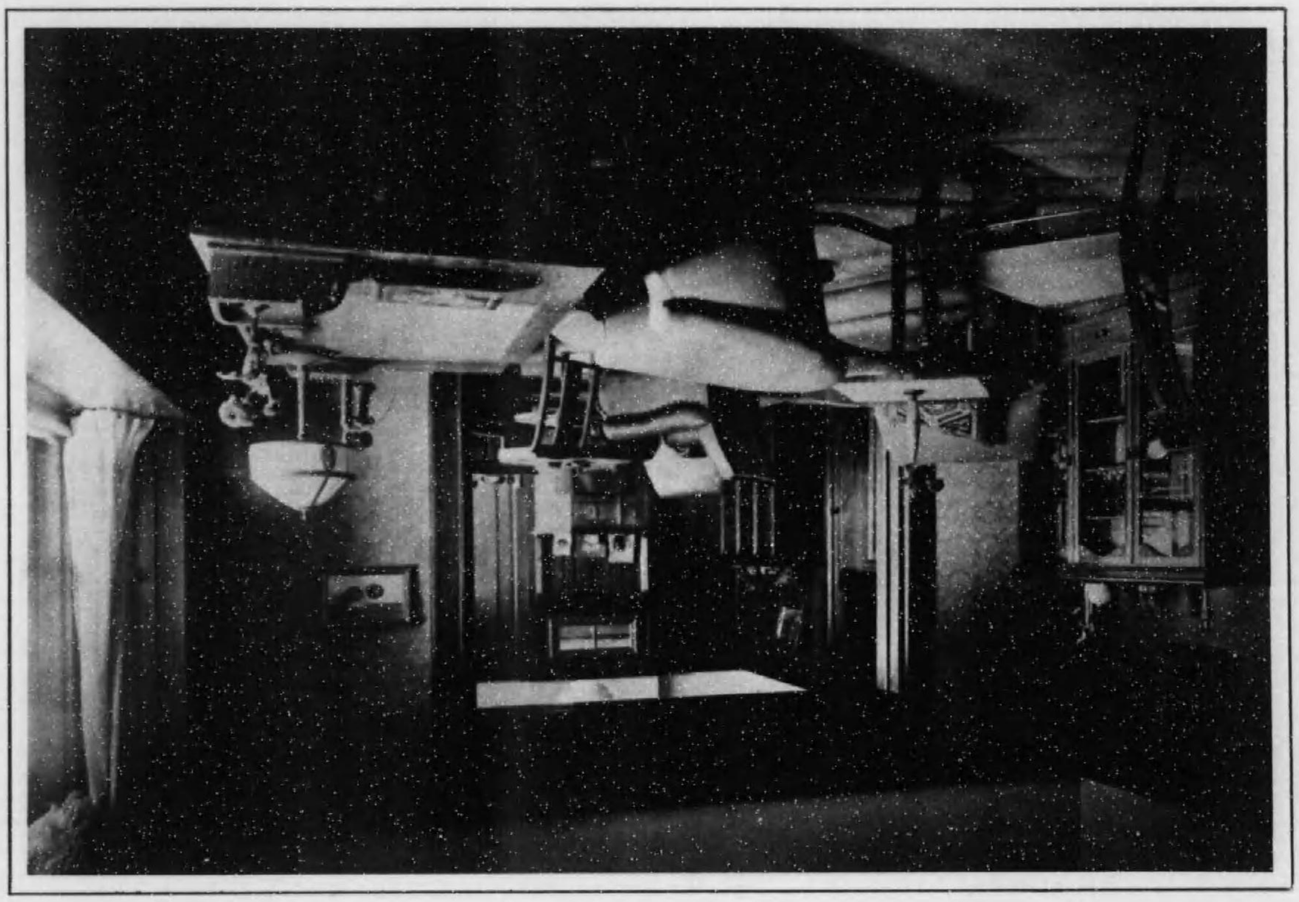
第二十二圖　池田侯爵邸　原宿　客間次室並廊下

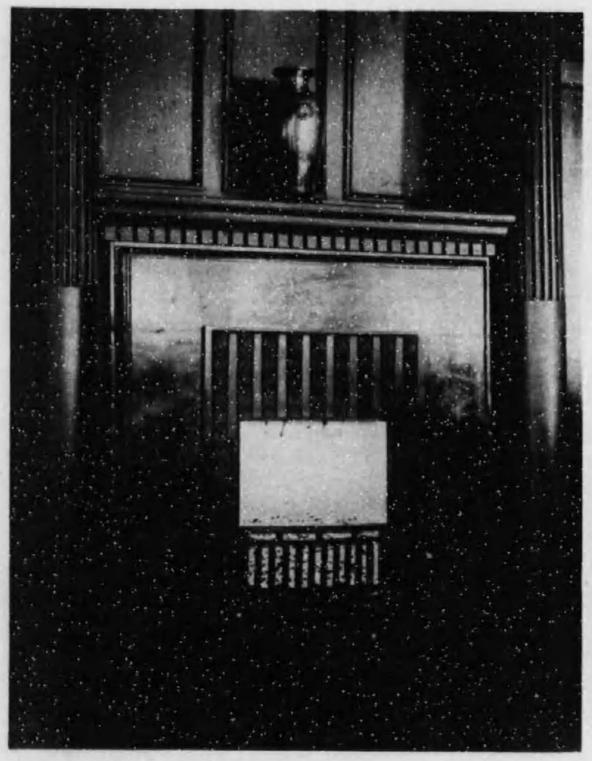
第二十三圖　池田侯爵邸　厨　室　　食　堂

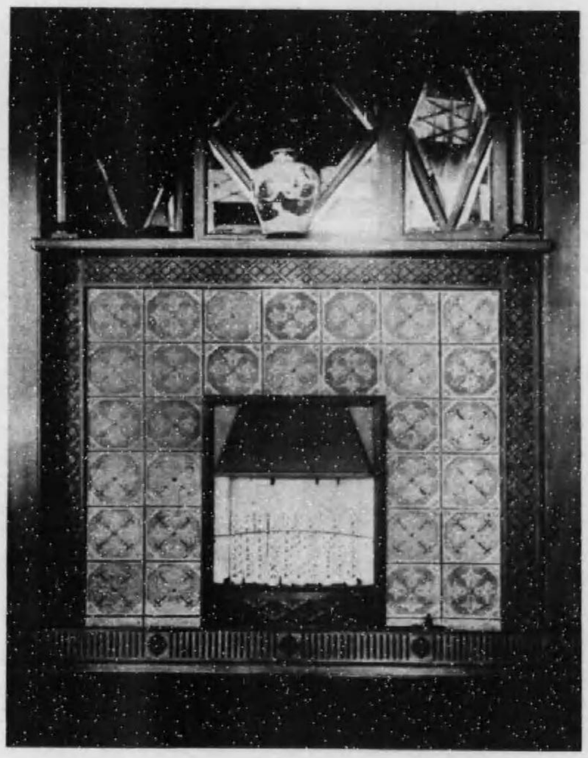




第二十八圖　池田侯爵邸　原宿　侯爵の書齋



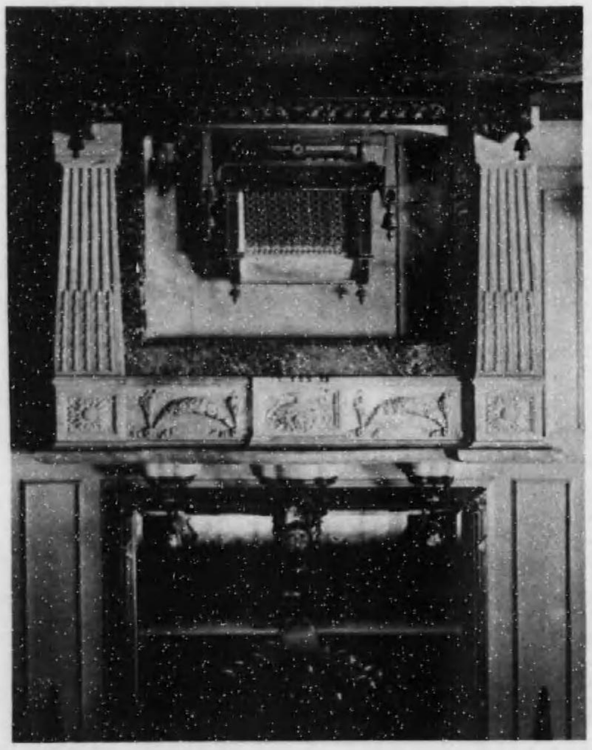


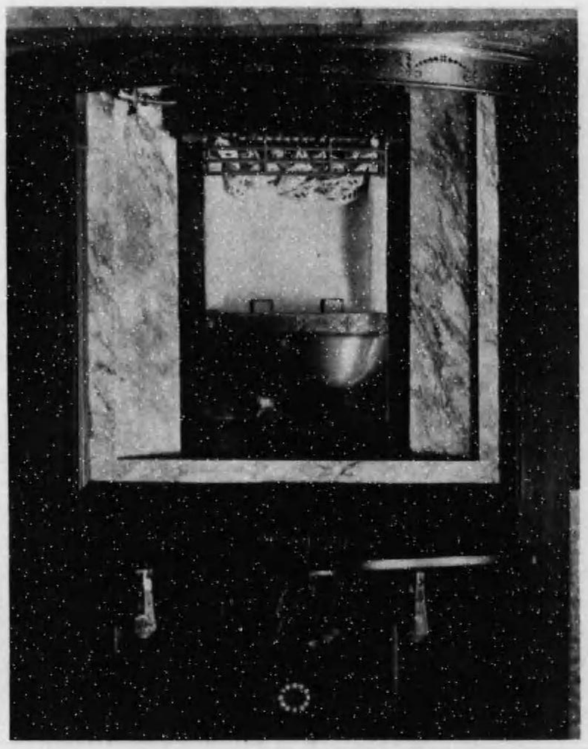


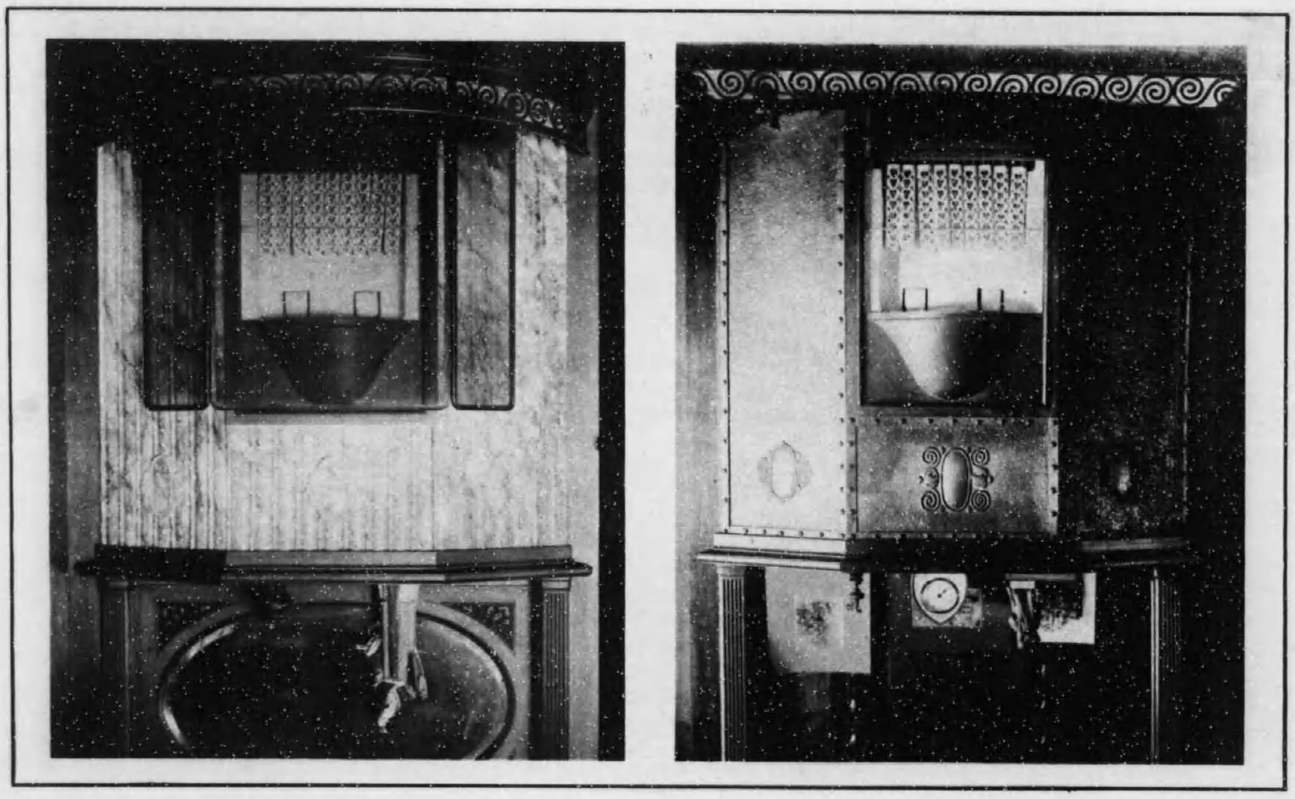
右夫人の客間の煖爐
左食堂の煖爐

池田侯爵邸

第三十圖



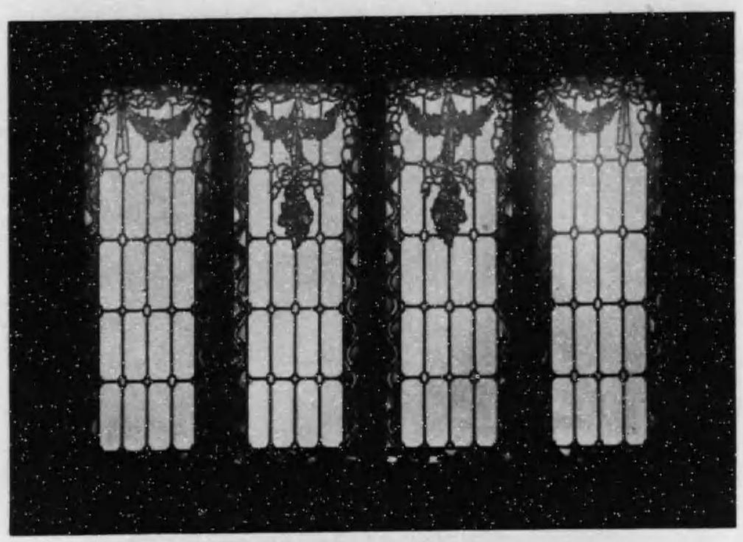


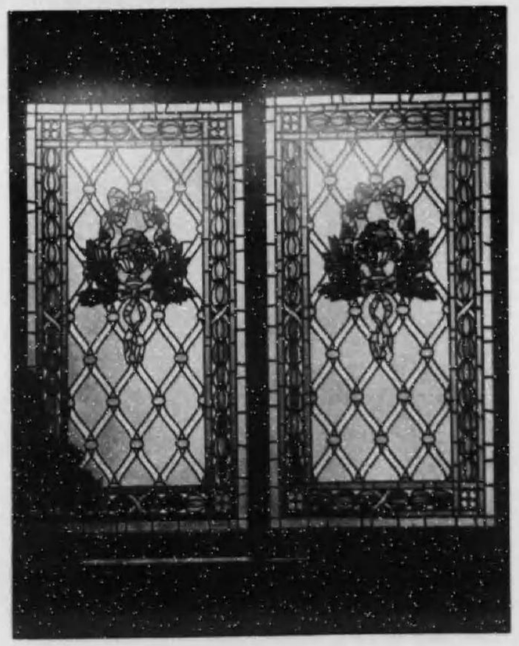


鐘紡の寫書の人夫 右
鐘紡の寫書の雜役 左

帝國鐘紡株式會社

圖二十三號





第三十三圖　池田侯爵邸　階段と廣間の窓

洪洋社が月刊として發行して居りますものに左の三種があります。

…**建築寫眞類聚**　門とか玄關とか茶室とか床の間かと各種の局部及び外觀等を、種類別に五十枚宛を一册とした頗る便利な實用的寫眞集で、目下六十種程既刊、會員組織でありますが、分賣も致します。（會費壹圓、分賣壹圓拾錢）

…**月刊『近世建築』**　外國の新刊圖書雜誌より近世的色彩の強い建物を選んで、十枚宛袋入とし、毎月順次譜號を附して一より百までを第一期とし、別にタイトルを作つて發賣致します。（一袋金五拾錢）

…**新住宅**　時代の要求に應じて生れた住宅研究の月刊雜誌で、一般家政上の立場から記述した豐富な文字や鮮麗な寫眞の滿載された氣のきいた美しいものです。（一册金三十五錢）

大正十年六月十七日印刷
大正十年六月二十日發行

田邊淳吉氏作品集
定價 金貳圓參拾錢

編者　佐藤功一
東京市牛込區市谷谷町九十三番地
發行所　高梨由太郎
東京市牛込區市谷谷町九十三番地
印刷者　高梨由太郎
東京市牛込區市谷谷町九十三番地
印刷所　洪洋社寫眞印刷部

發行所　東京牛込市谷谷町九三
洪洋社
電話番町一九九五番
振替東京二一八二四番

大阪市西區京町堀羽子板橋北
洪洋社關西代理店　柳々堂書店
電話土佐堀二四四〇番

建築家及一般藝術家操觚者に告ぐ

貴下は、建築藝術の鑑賞及建築の文化史的研究に志す人々の爲め、最も興味ある手頃な書物の出來たことを御存知ですか。御存知なれば

必ず伊東忠太、佐藤功一兩博士の懇切な指導監修になる洪洋社發行の建築文化叢書の名を忘れぬでありませう。一度本書を見た人は必ず全部の購約を申込んで參ります。全部十二册の叢書で、書目は埃及の文化と建築—希臘の文化と建築——印度の文化と建築—羅馬の文化と建築—ビザンチンの文化と建築—ローマネスクの文化と建築—ノルマン民族の文化と建築—ゴシックの文化と建築—回教徒の文化と建築—ルネツサンスの文化と建築(上)——ルネツサンスの文化と建築(下)—近代の建築思潮等であります。毎册記事約百餘頁、構造及細部圖解十數頁、三色版一葉、コロタイプ寫眞三十二葉、夫れに說明一枚宛を各寫眞と對照して挿入した洋裝金文字入の瀟洒な美本で書架の裝飾ともなりますから、品切にならぬ中是非御愛購の程願ひます。一册送料共金貳圓六拾五錢、全部の御購約には色々の割引法もあります。(內容見本請求次第送呈)

509
49

終